

『三四郎』

—西洋化社会の中の「迷羊」—

呉 勤 文*

1. はじめに

「近代」を「個人主義」の時代とする見方は、漱石の『私の個人主義』に現れる。他人の意見に左右されず、堂々と自己を主張するというのが、近代における個人の主体の確立への試みであった。文明開化中心地の都市へ進学した三四郎は、開化の様相に触れて、「自己の個性を完からしむる為に、なるべく多くの美しい女性に接触しなければならない」という決意を出した。三四郎の「個性」の主張は、自分を置き去りにする「現実世界」、つまり文明開化社会の時代潮流に対して、自己の立脚地を確かめる志向である。個人の主体の確立、すなわち自己確立への動きはそこから見いだせる。ことに三四郎の求める対象が「文明人種」、「露悪家」と称される美禰子であることから見れば、三四郎と美禰子の関係性はこの作品において、文明開化社会における自己確立の問題に関して、重要な意味を持つことが分る。そこで、三四郎と美禰子の関係性がいかに三四郎の文明開化社会との「共生」の有様を象徴しているか、小論はそれを中心に論じてみる。

2. 「迷羊」と三四郎の認識の問題

三四郎と美禰子の関係発展の一番有力な端緒について、美禰子から言い掛けた「迷羊」という言葉と、二匹の羊が描かれた絵葉書、そしてそれに

対する三四郎の認識が考えられる。三四郎は絵葉書の構図を見て、美禰子によって一對の男女として見立ててもらったため、始めて美禰子との関係性の発展を期待するようになったのである。しかし、その「迷羊」の認識に基づく期待はつい応えられなかった。美禰子と「立派な人」との結婚の後、美禰子の肖像画を掲げる丹青会で、三四郎がただ「迷羊」、「迷羊」を口の中で繰り返していたという結末となっている。そこから見れば、三四郎と美禰子の関係発展に対して、「迷羊」への認識の過程で、両者の間に確かにズレが存在することが分る。

千種・キムラ・スティーブン氏の指摘のように、『「迷羊」を探しに来るべきなのは羊飼いであって、同じ羊ではない¹』。菊見の会場から見物人に押しだされた美禰子は、すでに「責任を逃れたがる人」が小川辺でしゃがむ「迷子」のような自分を捜してくれない意を、付いてきた三四郎に伝えた上で、三四郎を「迷羊」の一匹として見立てたのである。クリスチャンの美禰子は「迷羊」という言葉を聖書から引用した。聖書において「迷羊」と悪魔は正しい道から離れたものであり、「迷羊」を探す「羊飼いは神の愛と寛大を象徴している。愛を与えるべき「羊飼いは、または「責任を逃れたがる人」が誰であるか、自分と同じように三四郎を「迷羊」に例えるという美禰子の捉え方から考えれば、すくなくとも三四郎は「羊飼いは及び「責任を逃れたがる人」の対象外である。一方、三四郎は恋ライバルの敵対意識をもって、「責任を逃れたがる」人が野々宮であるかと敏感に捉えたが、

*台湾大学大学院生

自身と美禰子との関係発展の可能性に対して、やはり「迷羊」を言い出す相手の真意を見抜けないところがあると考えられる。

それが三四郎の「虚妄」²と関連しているためか、作品の第十三章において、三四郎の「迷羊」に対する認識は語られていない。三好行雄氏は第十三章に現れる「全能的視点」の「統一」を指摘した³。その「全能的視点」を踏まえて、石原千秋氏は「全能的視点」を視点構造にした『三四郎』の結末を、「オープンエンディング」として捉え、そして「オープンエンディング」になる原因の一つを、「迷羊」の眩きにおける三四郎の認識の空白化が存在することとして提起した⁴。確かに、十三章はそれまで三四郎の視点から一転して、作中人物全体の行動を収める「全能的視点」に移った。「特別の待遇である」というような語りから、語り手を介して作者が意見を出す⁵ことも見られる。その一方、「全能的視点」の「統一」と三四郎の認識の空白化は、文明開化社会に置かれる上京の青年と「露悪家」の女性の関係性において、人間と社会の「共生」の問題をどう描出しているのか。まず三四郎の認識の問題から検討する。

3. うわべだけの三四郎の認識

三四郎の美禰子に対する認識は言うまでもなく「ヴォラプチュアス」のような官能的な姿から始まる。美禰子の「絵画的」印象は多く指摘されてきた。その鮮やかな「絵画的」姿を、「耽美主義者」⁶の三四郎は「目」で追う一方、美禰子が動き出すと「汽車の女」を想起し、彼女の「正体」を見抜けないことで悩んでいた。「汽車の女」は三四郎にとって「現実世界の稲妻」であった。「動く」美禰子の「正体」もまた「現実世界」に属するものであった。「現実世界」はすなわち、三四郎を置き去りにする「凡ての物が破壊されつつある」、「同時に建設されつつある」文明開化社会の様相である。変動する文明開化社会に対して、三四郎

は「不安」を感じる一方、「けれども学生生活の裏面に横たわる思想界の活動には毫も気がつかなかった。」(二) 千種・キムラ・スティーブン氏の指摘のように、語り手はそこで意見を出した⁷。そしてその書き加えとして「——明治の思想は西洋の歴史にあらわれた三百年の活動を四十年で繰り返している」(二) が次ぎに付け加えられている。語り手は文明開化の進行時間の短さという明治日本社会の事情について、三四郎が全く気付かなかったことを指摘し出すのである。

三好行雄氏は語り手の意見を三四郎に対する漱石の批判として捉えた⁸。西洋の開化が自然の推移によって百年かかって出来上がったものであるのに対して、日本の開化が新旧のものそれぞれの良し悪しを弁えないうちに、開化の潮流にどんどん乗せていく「上皮滑り」の開化であった⁹という「現代日本の開化」の内容から検証すれば、確かに語り手の意見における作者自身の意見の参入が見出せる。その一方、語り手だけでなく、作中人物が三四郎の認識との対比として意図的に描かれていることも見られる。

都市行きの汽車で三四郎と西洋人の乗り合いの場面において、西洋人に憧れる三四郎と自国批判を語る広田の認識が描写されている。明治日本社会の西洋への憧憬という一面が、無批評的に憧れる三四郎とそれを一つのアイロニとして見る広田の認識によって現される一方、三四郎の認識の浅さが広田との対照によって反映されている。そして、広田は「日本の物質界も精神界も」「時代錯誤」を露呈し、「古い燈台が、まだ残っている傍に、偕行社という新式の煉瓦作りが出来た。二つ並べて見ると実に馬鹿気ている。けれども誰も気が付かない、平気である。これが日本の社会を代表しているんだ」(四) というように文明開化の社会現象を指摘した。萬田務氏は精神面の旧さと物質面の新しさにおいて、「富国強兵」のための近代化に奉仕するとして「時代錯誤」を捉えたが、ここにも「現代日本の開化」で論じられるような、

棄てきれない古いものを物質文明の中に無自覚的に持ち込むという開化の矛盾と未熟の面が語られていると考えられる。西洋への憧れ、「上皮滑り」の開化というのは、まさに作者の文明批判の趣旨と合致している。かくのように、作者の批判の目を代表する語り手、そして作中人物との対照は、三四郎の文明開化社会への認識の不足を際立たせる。目まぐるしい文明開化社会の「うわべ」を茫然と眺めるという三四郎の認識が、この作品の露呈している「三四郎像」の一側面ではないかと考えられる。

文明開化社会の様相、つまり「現実世界」を視野に納めようとする三四郎の姿勢は、美禰子の「正体」に恐れを抱きながら、官能的な姿を目で追わずにはいかない姿勢と重なっている。その矛盾の中で、三四郎は「第三の世界」の存在を作り出し、自分には「主人公」たる「資格」を持つと考えた。「第三の世界」はつまり美しい女性との交際による「個性」の追求であり、換言すれば、三四郎の文明開化社会における自己主張の下書きである。それに対して、語り手によって指摘されたその社会認識の不足から見れば、三四郎の自己確立はまさに「うわべ」の社会認識に基づく行為であると考えられる。その上、『三四郎』の創作が煤煙事件の当事者をモデルとして作られた作品から見れば、「うわべ」の社会認識に基づいて自己確立を当たり前のように行おうとする点でこそ、三好氏の言う批判的意味が込められるのではないかと考えられる。「三四郎は切実に生死の問題を考えたことのない男である。考えるには、青春の血が、あまりに暖かすぎる。目の前には眉を焦がすほど大きな火が燃えている。その感じが、真の自分である」というのはまさに語り手の批判ではないか。そのため、青年三四郎の社会認識は単純に不足とは言いがたく、むしろ浅薄として捉えるべきだと考えられる。無論、美禰子の「正体」が「現実世界」に属しているこそ、三四郎の美禰子への認識の適確性も疑われべからざるをえなくなる。

4. 「露悪家」美禰子とその現実認識

「露悪家」という言葉は三四郎が美禰子の「正体」をつき詰めようとして、広田に訪ねる時教わった言葉であった。「露悪家」は昔の「偽善家」と相対する概念であって、他人に善く思われるよりもまず自己主張を肯定するという人間を指している。そして広田は「露悪家」の中には、「利他本位の内容を利己本位で充た」し、「偽善を行うに露悪を以て」し、「尤も優美に露悪家になろうとする」「極めて神経の鋭敏になった文明人種」のような一種も存在すると言っている。それを聞いた三四郎は「念頭に美禰子という女」がいる。広田の指摘した文明開化社会の中の「露悪家」が、三四郎にとって美禰子の「正体」を考える基準になったのである。

美禰子の「露悪家」的側面は、「露悪家美禰子が意識的に自己の自意識の満足のために、三四郎を虜にし、操作し、犠牲を強いようとする実態を暗に示した」¹⁰という秋山公男氏の指摘のように、のち彼女が展覧会で三四郎を利用して野々宮を愚弄してから、三四郎に「必竟あなたのため」という言葉や態度での思わせぶりを示す行為によって照応を示し、三四郎に実感を与えた。しかし、三好行雄氏が「三四郎と美禰子は等価の人物像として、小説の構想を支えていた」¹¹と指摘したように、三四郎の認識外の美禰子の「正体」も考え入れなければ、三四郎一方寄りの解釈になってしまう。

光田鮎美氏は、「極めて神経の鋭敏になった文明人種」、「優美な露悪家」である美禰子の「不足、苦痛」を、「感受性が人一倍鈍い」三四郎には分らないと指摘した¹²。小川辺で美禰子の「霊の疲れ」、「肉のゆるみ」、「苦痛に近き訴えがある」様子が三四郎の視点によって映し出された。その「苦痛」は実は「責任を逃れたがる人」と関連している。「いつ結婚を決めたのですか」「あの服装で分るでしょう」という一句によって、三四郎との出会いの時から美禰子はすでに結婚を考えていたこ

とが分る。「責任」を「結婚」という現実側面から考えれば、野々宮の下宿戻りと一家を構えないこと、つまり「結婚」から遠退いたことはまさに「責任を逃れたがる人」の条件と合致している。小森陽一氏の指摘のように、美禰子の兄、里見恭介が結婚したら、美禰子は「小姑」になるわけで、「生家を追われる妹」として「迷子」になる¹³。当時の女性は経済自立がほとんどできなかった。生きていく居場所を獲得するために、美禰子の唯一な手段は「結婚」であった。その対象を美禰子は自ら野々宮を選ぼうとした。野々宮の買ってあげたりボンをつける行為に、二人が相思相愛であることが分る。しかし、「日本という『場所が悪い』」という萬田務氏の指摘のように、野々宮が新式な学者となるには、貧しい生活を凌ぐため、世帯を持つことはまず不可能である。そこから見れば、美禰子の「不足、苦痛」は、実家という居場所の喪失と、「迷羊」の帰るはずの「愛のもと」すなわち「羊飼いの喪失であると考えられる。ことに美禰子は比較的自由的な空気の中で育てられ、我を張り通そうとする「自意識」の強い女性として造形されている。男女平等、女性の自立が認められない明治社会において、恋によって自己主張しようとする「文明人種」、「新女性」たる美禰子はその挫折感を一層深く感ぜられるはずと考えられる。それが三四郎の認識に入っていない「現実世界」の美禰子の「正体」であると考えられる。

三四郎の見逃している美禰子の現実はまだにその社会認識の浅薄さに繋がっている。三四郎の体験が「彼に蓄積され、その内部の発展の契機となるような存在として描かれていない」¹⁴という越智治雄氏の指摘のように、広田の文明批評が三四郎の内部の蓄積とならなかつたと同様に、原口の言説もならなかつた。九段の銅像を批判する原口の言説は、軍国主義への批評として、三四郎が上京の汽車の中で出会った「戦争犠牲者」¹⁵のお爺さんと「汽車の女」の苦境の現実描写に呼応したところがある。しかし、「他の文章と、他の葬式

を余処から見た」(十)という三四郎の内面描写から覗えるように、三四郎は自分が未だ体験していない現実の苦境について深く考えないため、社会の「現実面」から「目」をそらしてしまったという現実認識の姿勢がある。現実問題によって打ちのめされたという、美禰子の「霊の疲れ」、「肉のゆるみ」を三四郎は「目」で敏感に捉えたが、美禰子の「苦痛」の内実はつい「人の葬式をよそから見た」ようにその認識に入らなかつたと考えられる。

5. 二匹の「迷羊」

越智治雄氏の指摘したように、三四郎は「現実世界」に触れて常に「不安」であった¹⁶。開化の都市の様相のほかに、「官立学校の地位を競争している噂など」に対して「三四郎は漠然と、未来が遠くから眼前に押し寄せる様な鈍い圧迫を感じたが、それはすぐ忘れてしまった」(三)というように、「立身出世」のコースからほど遠いことが描かれている。そして、三四郎は文学部であるが、同窓の与次郎の行う文学活動や演劇活動に対して感心を示す一方、「のっぺらぼう」に授業を聞いているように、自分の選んだ分野で自分なりの意見と方向が見つからない迷妄も描かれている。そういう現実世界における自己確立の「不安」が、三四郎が美禰子との関係性を求める一番深層な原因であると考えられる。しかし「露悪家」たる美禰子に対して三四郎は表象の認識に基づくままその虜になったと同時に、官能への陶醉によって自己確立の夢をみ、また美禰子も「現実世界」に属することを意識する時、「明治十五年以前の香」にシェルターを求めるといような現実逃避の姿勢が存在していると考えられる。

一方、現実世界における自己確立の問題が、前述のような「極めて神経の鋭敏になった文明人種」である美禰子の場合になると、「不安」どころか、「苦痛」になる。美禰子と野々宮の間に空中飛行

機について論争があった。「高く飛ぼうと云うには、飛べるだけの装置を考えた上でなければ出来ないに極まっている」と主張する野々宮に対して、「そんなに高く飛びたくない人は、それで我慢するかも知れません」と美禰子は反論し、そして「我慢しなければ、死ぬばかりですもの」という野々宮の反論に対して、「そうすると安全で地面の上に立っているのが一番好い事になりますね。何だかつまらない様だ」(五)と言った。野々宮の合理的思考に対して、美禰子の発想は理性よりも感性による「詩人」的思考ではないか。もし、空中飛行機的话题を「結婚」という切実な問題に変えて考えれば、「結婚」するには経済的条件が必要であることが野々宮の合理的思考に対して、感性の「詩人」たる美禰子は、経済の難関に遭わされて「死んでも、その方が可いと思います」と言うことも不可能ではないと考えられる。

「迷羊」である美禰子のことが野々宮のことに深く関連していることから見れば、絵葉書の構図は三四郎への好意というよりも、「極めて神経の鋭敏になった文明人種」たる美禰子が、恋愛における自己確立の道という誘惑に迷ってしまった自身のことを「迷羊」として示し、そして西洋化の明治社会における自我の伸張の可能性と「現実」の危険性という矛盾を、「西洋の顔」の「悪魔」として表現したのではないかと考えられる。そして「迷羊」である自分を探してくれる三四郎を、同じくその「迷羊」の一匹として見立てたのも、西洋化の明治社会すなわち文明開化社会における三四郎の迷いを見抜けたことだと考えられる。

金の借り貸しによって二人の関係を繋げさせるという与次郎の策略に乗りかかってきた三四郎に対して、美禰子は最後に「金なんぞ…」と溜息を洩らし、自分の現実問題を痛感する一方、「われは我が愆を知る。我が罪は常に我が前にあり」と懺悔した。それは「あなたを愚弄したんじゃないのよ」という嘘への否定であり、三四郎を愚弄しようとする意図的誘惑への懺悔であろう。そこ

から見れば、「迷羊」という言葉の誘惑性に対して美禰子は自覚的であることが考えられ、「迷羊」は彼女自身の迷いを示すほか、三四郎への「偽善を行うに露悪を以て」するような悪戯としても捉えられよう。一方、美禰子が三四郎を愚弄したい気持も、彼女の社会における弱者性への不満と苦痛、及び三四郎の自身に対する認識の浅薄さへの気付きに関連する。三四郎が美禰子に金を借りる場面において、「美禰子は鏡の中で三四郎を見た。三四郎は鏡の中の美禰子を見た」(八)という会見の情景が描かれている。美禰子が三四郎を見ている様子は鏡に映し出され、そして、三四郎は鏡の中の美禰子の像を見た。文明開化の体現者と犠牲者である女の像を表象の認識で受け止めた三四郎は、あたかも鏡の虚像を見ているように美禰子を見た。それに対して、美禰子は三四郎本人を見詰めていた。そういう視線の描写はまさに互いへの認識の非対等性を象徴していると考えられる。それが美禰子が三四郎を結婚の相手に選ばなかった一番重要な原因だと考えられる。

美禰子は自我の感性の発露が現実世界に問われても、自我が認められることを期待しながら、雲が空を自由に行き来している模様を常に眺めている。しかし、それが最後に野々宮の下宿戻りの現実打ちのめされた。野々宮でなく、三四郎でもないという、「立派な人」との結婚は、まさに現実問題を前にして、時代の流れの中でできた自我を自ら折れ、一つの「見切り」¹⁷として、「迷羊」という自意識の産物と断ち切ろうとする動きではないか。そういう美禰子の結末はまさに「人間も光線も同じ様に器械的の法則に従って活動すると思うものだから、時々飛んだ間違いが出来る」(九)という作品中で討論されるような方法論の実現だと考えられる。

それに対して、三四郎は、「文明人種」である美禰子の振る舞いから「強烈な個性的の刺激」を受けたが、自分を「鈍感」だと疑ったように、他者認識に面する時の自己認識を三四郎は持ってい

るものの、「本来から」「自分が、こんな顔をして、こんな事を、こんな声で言って遣ろうなどとは決して考えない」(八)というように、甘い現実認識と現実逃避の姿勢はその自覚的改変を妨げた。三四郎の自己確立の動きは「うわべ」の認識で美禰子と接触していくという点で、社会弱者への認識と同情がないように、一種の利己主義としての「露悪家」たる傾向も認められよう。そのため、「迷羊」である三四郎は置き去りにされる「運命」を辿らざるをえないようになったのであると考えられる。

6. おわりに

総じて言えば、西洋化社会における自己確立の問題から派生した美禰子と三四郎の関係の破局は、とりもなおさず両者の現実認識、社会認識における自己認識と他者認識のズレにより生じたものであると考えられる。そして視点の転換によって、「迷羊」に対する三四郎の内面認識が空白のままにされ、結果的に結末を「オープンエンディング」にした一方、美禰子との関係性による三四郎の自己確立に対して、「全知的視点」に立つ語り手は冷徹な目で見ていと捉えられるのであろう。「明治十五年以前の香」にシェルターを求め、美禰子の官能的姿に陶醉し、切実に自己確立の方法を考えない三四郎は、最後において「墜落死」の「詩人」たる美禰子の唐突な決定にもかかわらず、やはり西洋化の文明社会との共生において、これからもいろんな衝突に遭い、その認識に迷いながら人生を歩んでいくのであろう。

註

- 1 千種・キムラ・スティーブン「『三四郎』試論(続)迷羊について」
- 2 越智治雄「『三四郎』の青春」
- 3 三好行雄「迷羊の群れ—『三四郎』2」
- 4 石原千秋「終わることの快樂—『三四郎』」

- 5 千種・キムラ・スティーブン「あてにならない観察者—喜劇としての『三四郎』—」
- 6 玉井敬之「三四郎の感受性」
- 7 註5に同じ。
- 8 三好行雄「迷羊の群れ—『三四郎』2」
- 9 「現代日本の開化」:「新しい波が寄せるたびに自分の中で職客をして気兼ねをしているような気持になる。新しい波はとにかく、今しがたようやくの思で脱却した旧い波の特質やら真相やらも弁えるひまのないうちにもう棄てなければならなくなってしまった」
- 10 秋山公男「『三四郎』小考—『露悪家』美禰子とその結婚の意味」
- 11 三好行雄「迷羊の群れ—『三四郎』1」
- 12 光田鮎美「夏目漱石『三四郎』論—浮上する美禰子像—」
- 13 小森陽一「漱石を読み直す」p.149-151
- 14 越智治雄「『三四郎』の青春」
- 15 吉田孝次郎「漱石三部作の世界」
- 16 註1に同じ。
- 17 三好行雄「迷羊の群れ—『三四郎』3」

参考文献

- 吉田孝次郎「漱石三部作の世界」『漱石作品論集成』第五巻, おうふう, 1995 (1954 初出)
- 越智治雄「『三四郎』の青春」『漱石作品論集成』第五巻, おうふう, 1995 (1965 初出)
- 三好行雄「迷羊の群れ—『三四郎』1~3, 『解釈と鑑賞』1966.01-03
- 萬田務「『三四郎』への一視点—その文明批評的側面—」『大阪城南女子短期大学研究紀要』11, 1976.11.
- 秋山公男「『三四郎』小考—『露悪家』美禰子とその結婚の意味」『漱石作品論集成』第五巻, おうふう, 1995 (1977 初出)
- 千種・キムラ・スティーブン「『三四郎』試論(続)迷羊について」『解釈と鑑賞』1983-05
- 玉井敬之「三四郎の感受性」『漱石作品論集成』第五巻, おうふう, 1995 (1988 初出)
- 千種・キムラ・スティーブン「あてにならない観察者—喜劇としての『三四郎』—」『漱石研究』第2号, 翰林書房, 1994
- 光田鮎美「夏目漱石『三四郎』論—浮上する美禰子像—」日本文学研究 36, 2001.02
- 石原千秋「終わることの快樂—『三四郎』」『解釈と鑑賞』2010-09
- 重松泰雄『夏目漱石集』III (『日本近代文学大系』26) 補注, 角川書店, 1972
- 小森陽一『漱石を読み直す』筑摩書房, 2006
- 夏目漱石『三四郎』新潮文庫, 新潮社, 2009
- 夏目漱石「現代日本の開化」『夏目漱石全集』10, 筑摩書房, 2009